

トタン屋根上でのオオセグロカモメの繁殖

田 沢 道 広

086-18 目梨郡羅臼町湯の沢 羅臼ビジターセンター

はじめに

1988年6月から9月にかけて、知床半島羅臼町市街地の、民家のトタン屋根上でオオセグロカモメが営巣するという、特異な繁殖例を観察する機会に恵まれたのでここに報告する。

なお、実際の繁殖過程における観察のほとんどは、営巣した民家の隣に住む佐々木泰幹さん（目梨郡羅臼町緑町）によって行われ、私はその情報を受けて若干の観察を加え、それらをここにまとめただけである。

オオセグロカモメは、北太平洋やオホーツク海、日本近海を主な生息地とし、カムチャッカ半島、千島列島、樺太、北海道沿岸などで繁殖している。北海道には知床半島のほか、大黒島、天売島、ユリリ・モユリリ両島等に繁殖地がある。知床半島では、主な繁殖地はウトロ側にあり、海岸の断崖や、大きな独立岩に集団営巣地がある（中川，1981）。

一方、羅臼側の海岸線では、車道が無くなる相泊よりも岬寄りである観音岩、メガネ岩、赤岩などの独立岩でごく少数が営巣している。

繁殖場所とその環境

繁殖場所は、目梨郡羅臼町緑町の五十嵐アパートで、羅臼町の中心街近くに位置する。羅臼町は、人口約8,000人の海岸沿いに細長い町である。中心部には羅臼川が流れており、川の両側に民家が立ち並んでいる。五十嵐アパートは、この川の南西側にあり、川から約20m離れた地点に位置している（図-1）。

建物は総2階建てで、屋根は比較的傾斜が緩い片流れで、トタンぶきであった。

巣は、屋根の傾斜の比較的上の方、羅臼川寄りに1巣であった（写真-1）。

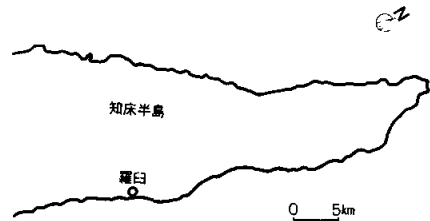


図-1 羅臼中心街における営巣地点



写真一 営巣場所と周辺の環境
(1988年6月23日)



写真二 抱卵中のオオセグロカモメ
(1988年6月23日)



写真三 ふ化後の雛と親鳥。雛の上方には飲み水用の容器、日よけのダンボール箱が置かれている。(1988年8月12日)

繁殖経過

最初に営巣が確認されたのは、6月23日朝で、佐々木さんによって抱卵が確認された。同氏によると、その数日前からカラスとカモメが争う声が極端に騒がしかったため、何日か前から抱卵に入っていたのではないかと、いうことであった。

正確な卵数は確認出来なかったが、抱卵交代時の観察では3卵までを認めることができた。周囲には絶えずカラスの姿があり、抱卵中の個体や、その個体と番になっていると思われる個体と鳴き合ったり、追いかかけ合いをしている様子が見られた(写真-2)。

7月18日にはふ化が確認されたが、ふ化後しばらくは親が腹の下で暖めていることから、実際のふ化日は2~3日前であった可能性もある。ふ化したのは3雛であったが、ふ化確認日の次の日には1雛に減っていた。実際にその瞬間を目撃した人はいなかったが、おそらくカラスに捕食されたものと考えられた。

7月30日夜半から、31日午前中にかけては暴風雨であった。そのため残った1雛が屋根から落ちて、近隣の住民によって保護され、再び屋根に上げられるという、人為的な干渉があった。

営巣確認時から周辺住民の関心を集めていたが、この時から人為的干渉が極端に多くなった。屋根上には、直射日光や雨を避けるためのダンボール箱がすえ付けられ、飲み水が入った容器が置かれた。また、絶えず食物が屋根上に置かれたが、その中には、魚類、イカなどに混じってスルメやバナナ、リンゴ、菓子類等も含まれていた。

雛は、カラスに脅かされながらも、暑い日や雨の降る日はそのダンボール箱の中に入り、人間が与える水、食糧(果物を除く)も利用して順調に育っていった(写真-3)。

9月1日、いつもより親と雛の声がうるさいと感じて外に出て様子を見ていた佐々木さんが、午後6時13分に雛の巣立ちを目撃した。屋根から飛立った雛は、親の後をついて海の方へ一気に飛び去ったそうである。

その後しばらくは、親と共に営巣した屋根上に戻って来たり、近くの羅臼川で親と並んで採食している様子が時々見られた。

知床における他の特異営巣例

知床半島での、オオセグロカモメの特異な営巣例としては、76年に、海岸から4km上流の羅臼川

の河原に営巣した例がある。そこは砂防ダムの建設によって出来た広い河原で、周囲は落葉広葉樹林に囲まれていた(松田・樋口, 1976)。また、斜里町知布泊海岸では、国道からわずか8mの所にある、海面からの高さ2mの岩石上に営巣した例もある(大泰司・中川編著, 1988)。しかし、この2例とも、卵はふ化に至らず途中放棄されている。

巣立ちが成功している特異例としては、知床半島先端部にある文吉湾沖に83年完成した、長さ120m、幅20mのコンクリート防波堤で営巣している例がある。完成した翌年から毎年数十の営巣があり、幼鳥が巣立っている(大泰司・中川編著, 1988)。

なお、今回の営巣とほぼ同時期に、羅臼川をはさんだすぐ反対側にある羅臼消防署の集合煙突上で、やはりオオセグロカモメが営巣を始めたが、カラスにじゃまされて巣を作っている途中で放棄してしまった例もある(田沢, 未発表)。

考 察

オオセグロカモメが民家の屋根上で繁殖した例は、おそらく本事例以外にはないものと思われる。それゆえ、貴重な記録ではあるが、逆に営巣に関わる様々な要因を比較する対象が少ない。

今回の事例と、先に上げた76年の羅臼川河原の例、及び羅臼消防署の集合煙突上の例を、営巣場所ということで比較すると、周辺が開けて見通しが良い、羅臼川の近くである、というふたつの共通点が見出せる。しかし、その条件だけを満たす環境は、羅臼川沿いの他の場合にもたくさんある。

また、羅臼側海岸線で実際に繁殖している地域は、観音岩より南西側には確認されていないが、地形的な条件のみで考えると、観音岩より南西の海岸線も、オオセグロカモメの営巣に適していると思われる独立岩や断崖のある地域はいくつかある。つまり、わざわざ人工建設物を利用せずとも、その自然の地形を利用すれば、普通に自然海岸で繁殖できたものと考えられる。

また、本事例のオオセグロカモメの繁殖時期は、知床における他の同種の繁殖に比べ、比較的遅かった。このことから、本事例における個体は、他に繁殖場所が見つからず、しかたなく民家の屋根という場所を選んだとも考えられる。

さらに、オオセグロカモメの営巣は、コロニー

(集団営巣地)を作って複数で行われるのが普通である。今回は1巣のみであった訳だが、こういうパイオニア的な個体が時々出現することによって、結果的に新しい営巣地が開拓されていくのかもしれない。

いずれにしても、それぞれ推測の域を全く脱しないし、この個体が民家の屋根という営巣場所を選んだ理由とその意味を知るには至らない。

まとめ

88年6月から9月、知床半島羅臼町中心街近くにおいて、民家のトタン屋根上で、オオセグロカモメが繁殖した。

6月23日に抱卵が確認され、7月18日に3羽のふ化を確認、雛はふ化確認の翌日には1羽に減っていた。雛は、様々な人為的干渉を受けながらではあるが順調に育ち、9月1日に巣立った。

親と雛とは、巣立ち後も時々繁殖した屋根と、近くの羅臼川で見かけられた。

オオセグロカモメが民家の屋根に営巣、繁殖した例は、これまでに例が無いと思われるが、なぜその場所を繁殖場所を選んだかは、はっきりとはわからなかった。

文 献

- 松田道生・樋口行雄, 1976: オオセグロカモメの特異な営巣例. 鳥, 25: 81-82.
- 中川 元, 1981: 知床半島の鳥類調査報告. 知床半島自然生態系総合調査報告書(動物編), p. 43-79, 北海道.
- 大森司紀之・中川元(編著), 1988: 知床の動物, 北海道大学図書刊行会, 420pp.